

学び合いを支える言語活動の充実 ～「対話」を通して主体的に読む力を育む授業の創造～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

学校提案「学びをデザインする子どもたち ～課題意識の深化を通して～」を受けて国語科部では、本年度の研究テーマを「学び合いを支える言語活動の充実 ～『対話』を通して主体的に読む力を育む授業の創造～」とした。

言語活動の充実が実践課題となっている中、国語科部では、「学び合いを支える言語活動」とは、その場その場で教師によって与えられた指示に従って学習を進めるのではなく、子どもたち自身が明確な意図をもって学習を進めていくことができる言語活動と考える。クラスみんなが安心して学べる学級風土の中で、子どもたち一人一人の課題意識を深化させながら夢中になって学べる授業をめざし、充実した言語活動を取り入れた授業づくりを研究していきたい。

(2) 国語科でめざす子ども像

第2期教育振興基本計画（平成25年6月閣議決定）では、「自ら課題を発見し解決する力、他者と協働するためのコミュニケーション能力、物事を多様な観点から論理的に考察する力などの育成を重視する」とし、「生涯にわたる学習の基礎となる力」と「答えのない問題に向き合う力」の育成を重要課題と位置づけている。それ故、国語科学習においても、知識習得中心の学習から、豊かな読書や実体験に基づいた深い思考力と表現力が要求される学びへと転換していく必要があると考える。自然、人間、社会との関係において、「正しいものの見方」や「豊かな思考力」を学ばせながら、国語科学習を通して人格形成をしていきたい。

①「主体的に読む力」を高めていける子

「主体的に読む」とは、言われなくても、「大事だな」と思う言葉や文章に注目し、そこに立ち止まって「問い」をもつことである。受け身の学びではなく、子どもたち自身が、「学ぶことの意義」を理解し、学びを進めていける子を育てていきたい。主体的に学びに取り組むことにより、学習意欲が継続し、著者の思いに触れることができる。そのことにより、自分の言葉が洗練され、創造力が高まり、コミュニケーション力が高まっていくものと考えられる。

②「かかわり合い」を大切にできる子

教室が、子どもたち同士の学び合いの場になっているか。子ども同士のつながりがある授業であったか。本来「学び」とは、子どもたちが他者との議論や対話の中で育まれていくべきものである。その「学び」が、「個人化」「競争化」している昨近、子どもたちにとって、「学び」の中に、「かかわり合い」があることは大変重要なことであると考えられる。子どもたち一人一人が、友だちと、先生と、そして教材と「かかわり合い」ながら、学びを進めていける子を育てていきたい。

③「学びの振り返り」ができる子

「振り返り」こそが「学び」であると考えられる。「思考」とは、「熟成」によって生まれるものであり、簡単に自分の考えは生まれない。子どもたちが自分の学んだことを振り返ることのできる「学びの足跡」を残していくことが大切であると考えられる。教師にとっても、「学びの振り返り」は大切である。学習課題が子どもたちにとって「心弾むもの」になっていたのか。「追求の質」を高める「問い」であったか。子どもの発言に対して、教師が出過ぎていないか。以上のようなことを検証していく必要がある。子どもたち一人一人がどんな言葉を残しているのかを評価し、そこから子どもたち一人一人に合った指導のあり方を考えていきたい。

2. 国語科学習における「学びをデザインする子ども」

国語科部では、「国語科における課題意識の深化」を次の表のように考えている。

低学年	中学年	高学年
楽しみながら、言葉や動作で伝え合う中で、自分の考えをもつことができる。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞き、そこから気づいたことを伝え合ったり、自分の考えを深めたりすることができる。	多様な考えに進んでかかわり、自分の考えをもち、関わり合いの中で自己の変容に気づくことができる。

今年度国語科部では、子どもたちが学びをデザインしていくことができるような支援のあり方を「言語活動の充実」をテーマに探っていきたい。

(1) つけたい力の明確化

国語の能力は螺旋的・反復的に繰り返しの学習の中でこそ身につくものである。それ故、ある単元において、どのような言語活動を位置づけるかの前に、教師から見て、子どもたちの実態を把握し、教材の特徴（魅力）を理解する必要がある。その上で、指導のねらいを十分に確認し、単元を通して子どもたちにつけたい力を明確化する必要がある。

(2) 単元を貫く言語活動

言語活動を充実したものにしていくためには、単元を貫いて言語活動を位置づける必要がある。言語活動を単元の一部にしか位置づけず、前後で関連のない別の言語活動を行うのでは効果は上がらない。充実した言語活動とは、子どもたちにとって学習の見通しをもたらす活動であり、子どもたちにとって具体的な目的や必要に応じての活動でなければならない。さらに、指導上の重点的なねらいを実現していくために学習活動を精選していくことも重要である。

(3) 教材との出会いの工夫

子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫していく。例えば、同一シリーズや同一作者の作品を読みやすい環境を教室に整えることで、子どもと教材との距離が縮まり、そこで教材と出合わせることで、子どもたちの学習への関心意欲は高くなるであろう。子どもたちが、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入の工夫が必要である。

以下に四年生「一つの花」の実践例を用いて、「学びをデザインする子どもたち」に迫ってみたい。

単元を通して、子どもたちに「つけたい力」を育むために、本実践では、「多読」と「4 A 平和宣言を発信する」という二つの言語活動を取り入れた。

①「戦争と平和の読書コーナー」の開設

本単元では、「戦争と平和」という難しいテーマで学習に取り組んだ。それ故、単元に入る前に、子どもたちと教材とのやさしい出会いのために、教室に和歌山市民図書館からお借りしたおよそ 50 冊の「戦争と平和」をテーマにした本を並べた『戦争と平和』読書コーナーを設けた。また、読み聞かせボランティアのお母さん方に協力していただき、「戦争と平和」をテーマにした作品の読み聞かせをしていただいた。このような出会いを通して、子どもたちは、朝の読書タイムなどを利用して、「一つの花」の学習と並行して、たくさんの「戦争と平和」をテーマにした作品に親しむことができた。



②「4 A 平和宣言」を発信する

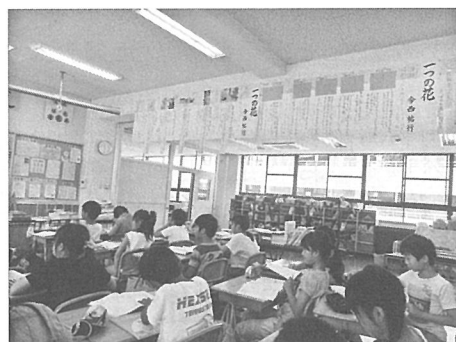
「一つの花」や「戦争と平和」をテーマにした他の作品を学習する中で、自分の考えを大切にしながらも、一人一人の感じ方について違いがあることに気づき、「友だち」の考えも大切にしながら、「4 A 平和宣言」を創りあげた。子どもたち一人一人が「戦争と平和」について、真剣に考えて書くことができた。学習のまとめとして、和歌山大空襲のあった 7 月 9 日に毎年行われている「和歌山市戦災死者追悼法要」にもクラス全員で出席させていただいたことも、子どもたちにとって、戦争の悲惨さと平和のありがたさを改めて考える貴重な機会となった。



③学びの筋道を振り返ることのできる環境作り

本実践では、「4 A 平和宣言を発信する」という言語活動に向けて、「一つの花」で学んだことはもちろん、時代背景や関連する他の作品で学んだことなど、教室に子ども

たちの「学びの足跡」を掲示し、いつでも自分たちの学びを振り返ることのできる環境を整えた。自らの学びをフィードバックする学習の積み重ねにより、「学びをデザインできる子どもたち」に少しずつ成長して行ってほしいと願っている。



☆以下に実践例を示す。お父さんが「なぜ一輪のコスモスを手渡して何も言わずに、にっこり笑って去って行ったのか」を考える場面である。

こうじ：ごみすて場のところに花が何本もさいていると思う？
はるき：もしさいてたとしても1つだけの価値があると思うんだけど。1つだけの喜びってあるから。(教室の掲示を指し示しながら)
教 師：どこどこ？あっ。あそこやな。たくさん咲いていたとしても1本だけしかとらなかった？
はるき：1本だけだと思うけど、66ページのコスモスもいっぱいあったから。
さちこ：でもお父さんが無理やりにたくさんとってゆみこにおしつけるのはおかしいと思う。
たいち：このとき、汽車がきてるんだがそんなにとらないと思う。
みゆき：1つだけ、花をもらって喜んでいるのか、1つだけ、もらってよろこんでいるのか。1つだけもらって、キャッキョって喜んでいると思う。
教 師：ゆみこの喜びは花じゃないんだね。
ゆうた：ゆみこはコスモスを1つだけちょうだいと言っていない。
りょう：1つだけ、1つだけってゆって、何がほしいと言っていない。
はると：1つだけおにぎりをちょうだいって言うてもう食べてしまったから。
教 師：たまたまコスモスを手渡したの？もう1こ確認したんやけど、ゆみこのにぎっているこの花を見つめながらやで。ゆみこじゃなくて、お母さんじゃなくて。おにぎりのかわりの花を見つめながら？
ともき：ゆみこのお父さんは絶対に死ぬとは限らないから、ゆみこやお母さんには会えるけど、コスモスはかれてしまうから。
なつき：コスモスは自分の代わりにして育ててほしい
教 師：おにぎりのかわりやったのがお父さんのかわり？ どっち？
ようへい：でもお父さんのかわりっていてもそれをみたお父さんが何かで喜ばせよう、泣きやませようとしたんだから、自分のかわりってというのはちょっとおかしい・・・
ゆうか：おにぎりをちょうだいってゆったわけじゃなくて、「1つだけ」ってゆったから。
教 師：コスモスじゃなくてもよかった？けど自分のかわり？
ゆうか：コスモスじゃなくてもよかった。
みわこ：ゆうかさんに似てる。1つだけってやめるかもしれないし、そのときにコスモスのことを覚えてたら、またこのことを覚えてたら思い出してくれるかな。
みゆき：花に願ってゆうか、元気でねとか、自分の思いを花にこめた。
ゆうじ：この花を見て、お父さんを思い出してね。
教 師：お父さんを思い出してね？これに似てる人？
みわこ：64・65ページを見てください。1つだけのおにぎり、あめ、全部食べ物ですよ。今までとはちがうものと渡したら覚えているかもしれないし、これまでとちがうものを渡したら、戦争がなくなるような気がするから。
(その後、グループでの話し合い)

一輪のコスモスの花を「おにぎりの代わり」として渡したのか、「自分(お父さん)の代わり」として渡したのかを、対立した考えを、教科書の文章や教室の掲示(学びの足跡)に根拠を求めながら意見を出している子が多くいた。国語の授業としては、自分の想像の中で発表するのではなく、文章や学んだことを根拠に発表している子を認める教師の姿勢が大切である。また、話し合いに参加できる子とできていない子の差も感じたため、グループでの話し合いの時間をとった。みんなの前では発表しにくい子には有意義な時間になった。

3. 研究の展望

「学び合いを支える言語活動」を充実させるための研究の展望を以下の三点から述べてみたい。

(1) 人間関係を育む言語活動

教室の中の言語活動は、同じ教室で共に学ぶ仲間同士の関係性の上に成り立っている。教室内の言語活動は、仲間同士の関係を新たに構築したり、更新したりしながら、さらなる言語活動を生み出し、人間関係を活性化させていく。教室内の言語活動を充実させ、質を高めていくことは、教室内の人間関係を育むことと同義だと言える。それ故に、漫然と言語活動を繰り返すのではなく、例えば、劇化をしたり、新聞や詩を書いたり、討論をしたりなど非日常的な言語活動を取り入れたり、他のクラスや学年の友だち、家族、地域の方々を対象として、言語活動の輪を広げたりなどの工夫が大切になってくる。教室の中の言語活動に、毎日の生活の中だけでは経験できない様々な教室外の風を取り入れることにより、言語活動がより充実し、それと共に教室内の人間関係も充実していくものと考えられる。

(2) 「対話」による学び合いの充実

「対話」とは、「自分とは異なる価値観をもつ他者との協同活動の中で、お互いの思いや考えを理解し合い分かち合いながら、その差を摺り合わせていく作業」と考える。「対話」を通して、学び合いを充実させるためには、お互いに対等な関係の中で、受容的に聞く姿勢が大切である。また、「学び合う必要感のある課題」を提示し、「学び合ってよかった」という体験の積み重ねによって、生活の中に生きてはたらくコミュニケーション能力が育まれていくものと考えられる。さらに、学習指導要領解説にも書かれているように、「系統的・段階的に上の学年とつながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返し学習する」ことが大切である。それ故に、子どもたちの学習状況を評価し、学習指導計画を修正しながら、学び合いを活性化させる必要がある。「対話」による学び合いを通して、他者と出会い、他者と関わり合うことで、自己の認識を構築・深化・拡充していくことができる。その過程で、「思考力」「判断力」「表現力」を育むことが可能になるものと考えられる。

(3) 「ティーチング（教える）」「シェアリング（共有化する）」「ケアリング（気づかう）」を大切にしたい授業

「学びをデザインする」とは、子どもたちが主体的に学習を進めていくことである。ここで言う「ティーチング」とは、子どもたちが興味関心をもって学習に取り組める工夫はもちろん、学び合いを充実させるために、授業において、学び合いを組織する教師の対応力のことも意味する。「シェアリング」とは、学び合いの中で出た友だちのステキな考えが他の子にも分かち合えることを意味する。さらに、「ケアリング」とは、意欲的に学習に取り組めない子や意見をまとめて発表するのが苦手な子に対して、学び合いに入っているように寄り添ってあげることを意味する。「ティーチング」「シェアリング」「ケアリング」を大切にしたい授業は、言語活動の充実につながり、さらには、「生涯にわたる学習の基礎となる力」と「答えのない問題に向き合う力」の育成、つまり、「生きてはたらく国語の力」の育成に大きな影響を与えるものと考えられる。

4. 研究の評価

学校提案の「学びをデザインする子どもたち～課題意識の深化を通して～」がどの程度達成できたかは、子どもたちの学びの軌跡を評価しなくてはならない。そのために、授業記録をとり、子どもたちの学びの実際をできる限り詳しく記述することにより評価した。そこで、評価と支援が一体となるように、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて、長期的な研究の成果と課題についても把握を行った。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行うこととした。

(参考文献)

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説国語編」 東洋館出版社
水戸部修治 (2013) 「小学校国語科授業&評価パーフェクトガイド」 明治図書